



# 高瀬中だより

校長通信 No.3

2021.6.11

## 「負けに不思議の負けなし」

校長 千秋 久宣

「野村克也（のむらかつや）さん」という名前を聞いたことがあるでしょうか。昨年2月にお亡くなりになった野村さんは、元プロ野球選手・監督であり、選手時代は、日本初の三冠王（同一年で打率トップ・打点王・ホームラン王）となり、監督としても日本一に輝いた名将でありました。野村さんの残した言葉に、座右の銘として有名になった「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」という言葉があります。この言葉はもともと江戸時代の大名で剣術の達人でもあった松浦静山（まつうらせいざん）の随筆集『甲子夜話（かっしやわ）』にある一節から引用されたものです。「負けるときには、何の理由もなく負けるわけではなく、その試合中に必ず何か負ける要素がある。一方、勝ったときでも、すべてが良いと思って油断すべきではない。勝った試合でも何か負けにつながったかもしれない要素がある」という意味です。

さて、3年生の部活動にとって集大成である最後の総体やコンクールが近づいてきました。できれば、1つでも多くの試合に勝ったり、より上位の成績を収めたりして、県大会、四国大会、全国大会へと進んでもらいたいものですが、思うような成績が収められなくても、自分のベストを尽くし、精一杯頑張った結果であれば、それはとても価値のあることだと思います。そして、本人にとっては一生の思い出となり、周囲の者にとっても感動を覚えるものとなるはずですよ。

すんでしまったことを「あのときにこうしておけば……」などと後悔し、思い悩んだことはないでしょうか。そのとき、後悔だけで終わったのでは、次の一步を前向きな気持ちで踏み出すことはできないでしょう。向上心のある人は「反省」があるといいます。「反省」は後悔とはちがいます。「反省ができる人」は「不完全な自分」を自覚して、同じように「不完全な他人」を受け入れ、認めつつ、共に前向きに歩むことができると思うからです。自分の失敗を誰かから言われた時、素直に受け入れられないことがあるかもしれません。しかし、他人から批判されなくても常に自分自身を振り返って、自分の姿勢を正していける人は、よほどの「できた人」かもしれません。ほとんどの人は、人から忠告されて自分の失敗や欠点に気づくことが多いと思います。そもそも、私たちの失敗や欠点を面と向かって忠告してくれる人は少ないでしょう。でも、そうした忠告こそ「貴重な反省の機会」と受け止めて、明日への力にかえてほしいと思います。「負けた試合」にも「勝った試合」にも次につながるものを見つけることが大切だと思います。

私の部活動経験は中学・高校とバスケットボール、就職してからは、卓球、ソフトテニス、バスケットボールの指導でした。現役時代はわからなかったことも多かったのですが、いろいろと指導経験を積む中で、やはり共通して大切にしなければならないことが見つかったように思います。生徒のみなさんには、家族をはじめ周囲の関係者のおかげで、部活動ができていることを一番にわかってほしいです。そして、その感謝の気持ちは、練習や活動、試合、コンクール等で「一生懸命に取り組む」ことで返してほしいと思います。